

子どもの発達に対する保育者の評価 —発達評価項目の検討—

A Study on Teachers' Evaluation of the Contemporary Preschoolers' Development: The Validity of Items of Developmental Estimation Questionary

長田 瑞恵¹⁾ 関口 はつ江³⁾ 野口 隆子¹⁾ 加藤 陽子²⁾
Mizue NAGATA Hatsue SEKIGUCHI Takako NOGUCHI Akiko KATOH

要 旨

これまで筆者らは、6領域128項目から成る発達評価を使用して、現代の子どもたちの発達を縦断的に検討してきた。その研究過程で、次第に発達評価項目の妥当性が問題となってきた。筆者らが使用する発達評価項目は約40年前の調査で使用された項目群を基にして、現代の子どもの実態に沿うように項目を変更、改良したものであった。そこで、本研究では筆者らが用いてきた発達評価の項目の妥当性について検討を行った。具体的には、同一の子どもについて2名の評定者が独立に評定した場合の評定の一致率を分析した。その結果、2名の独立した評定者が評定した場合にも評定の一致度が高い項目が大半を占めることが示された。一方、一致度の低い項目は2項目のみであった。したがって、これらの発達評価項目は子どもの発達の実態をかなり正確に反映しており、発達評価項目の妥当性が保証されたと言えよう。

はじめに

本研究は幼児期の発達の実態を出来る限り客観的に測定するための発達評価を作成し、その妥当性を検討することを目的とする。

現代の幼児の発達の実態を明らかにすることは重要である。なぜなら、近年、幼児の生活環

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

The Course of Early Childhood Care and Education, Department of Early Childhood Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

³⁾ 東京福祉大学

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare

キーワード：発達評価 保育園児 保育者 項目妥当性

境の変化による発達の問題が指摘されているからである (e.g., 仙田, 2005)。

いくつかの先行研究から、子どもの発達の実態に変化が生じていることが報告されている (e.g., 秋山, 2004; 郷間, 2003, 2006; 関口, 2003)。これらの研究は異なる発達検査、発達評価を用いているにもかかわらず、過去と比較した場合の現在の幼児期の発達の遅れを指摘していることは、この時期の発達の変化が顕著な現象として生じていることを示していると言える。その一方で、幼児期の発達の遅れだけでなく、発達の回復を示す研究もある。関口(2003)では、3歳児で見られた発達の遅れが5歳児においてはかなり回復しており、幼稚園教育の影響力が大きいことが示唆された。

以上のような幼児期の発達の変化を示した先行研究の結果をふまえ、筆者らは現在の幼児の発達状態をさらに詳しく把握するために、継続して検討を行ってきた。関口・長田・野口(2005)では、各幼稚園における一人一人の幼児の育ちの過程をよりの確に捉えるために、評価項目を修正して発達評価項目を現在の幼稚園教育要領のねらいに即する内容を含む6分野にして検討を行った。さらに、長田・野口・関口(2006)では、同一調査対象者に対して同一年度内に発達評価調査を2度実施した。その結果、第1回よりも第2回の方が達成率は高く、この傾向は特に年少児と第1回の達成率が低い子どもに顕著であることを示した。

関口ら(2005)と長田ら(2006)の研究は、横断的検討もしくは、同一年度内という比較的短期間における縦断的検討であり、より長期的な視点からは、一人の子どもの連続的な発達過程や発達の速度というような縦断的実態は十分には検討されてこなかった。そこで長田・関口・野口(2007)では、幼稚園児を対象に二年度に亘って発達評価調査を2度実施し、現在の幼児の発達の縦断的变化を検討した。その結果、3歳児クラス終盤から4歳児クラス終盤にかけての1年間よりも、4歳児クラス終盤から5歳児クラス終盤にかけての1年間の方が、達成率の伸びが大きかったことが示された。さらに、長田・関口・野口(2008)では、3歳から5歳までの幼児期の3年間に亘る期間における発達を検討した。その結果、当初、達成率の低かった下位群では、6領域すべてにおいてその後3年間に亘って直線的に達成率が伸びていた。その一方で、当初達成率が中程度だった中位群では、知的領域と運動的領域においては3年間に亘って直線的に達成率が伸びていたが、それ以外の領域では3歳児クラス終盤と4歳児クラス終盤との間では達成率が伸びず、5歳児クラス終盤になって達成率が伸びていた。さらに、当初達成率が高かった上位群では、3歳児クラス終盤と4歳児クラス終盤との間では達成率が伸びない、もしくは低下してしまい、5歳児クラス終盤になって達成率が伸びていた。

集団全体の平均を検討した以上の横断的研究と縦断的研究から、現在の幼児の発達の実態がかなり明らかとなってきた。それでは、幼児期の発達には、子どもたちの間にどのような個人差が存在するのであろうか。長田・関口・野口(2009)では、幼児期の発達の実態をより詳しくとらえるために幼稚園入園から卒園までの3年度4時点に亘り、発達評価結果の特徴によって示される発達パターンに焦点を当てた分析を行った。調査4時点の各時点において、6領域の達成率の高さやバランスによって発達のパターンを分類した。その結果、まず、3歳1学期には全体的に達成率が低いところに8つのクラスタが抽出され、3歳3学期には一端クラスタ数が減るもののクラスタ間にばらつきが見られた。そして、4歳3学期にはクラスタ数が増え、個人差が大きくなった後、最終的には5歳3学期に、再度クラスタ数が減り、達成率が高い位

置に収束していった。

しかし、長田ら（2009）の結果からは、子ども一人一人の発達の様相までは明らかとならない。そこで、長田・関口・野口（2010）では、さらに発達パターンの違いに焦点を当て、子ども一人一人が3年の間にどのような発達の变化を示すのかを検討した。具体的には、幼稚園入園から卒園までの三年度4時点に亘り、発達評価の個人差に焦点を当てて検討する。調査の各時点における6領域の達成率の高さやバランスによって発達のパターンを分類したクラスタ分析の結果に基づき、各時点において対象児がどのクラスタに属するかを分類したのちに、その分類を子ども一人一人について時系列につなぐことによって、3年間にどのような発達パターンの変遷を示すかを検討した。言い換えれば、調査の各時点におけるクラスタ分析の結果に基づき、各時点でどのクラスタに属したかを時系列につなげ、クラスタ遷移を分類したのである。そして、発達のプロセスには多くの子どもが辿るような「典型的なパターン」が存在すると言えるのか否かを探索的に検討した結果、全体としては、調査各時点間でのクラスタの遷移の仕方は非常に多様であることが示された。その一方で、第1回調査における集団内の相対的な相対的位置は、その後も一貫して続く傾向があることが伺われた。したがって、幼児期の発達のプロセスは、当初どの程度の達成率にあったかという初期状態の影響を受けつつも、そのみに規定されるわけではないと言えよう。

この長田他（2010）では、発達パターンの検討方法として、各時点を横断的にクラスタ分析した結果を時系列につなぎ合わせて分類するというやり方を用いた。さらに長田・関口・野口（2011）では、子ども一人一人を縦断的につないだ時系列の変化パターンそのものをクラスタ分析にかけるという方法を用いて、発達パターンの個人差を検討した。具体的には3年度4時点に亘る発達評価の個人差に焦点を当て、4時点でどのように達成率が変化したのかによって、時間的経過に伴う発達の推移のタイプを分類することを試みた。その結果、子ども達は3つのタイプに分類された。タイプⅠは各時期を通して一貫して集団内の上位で推移した子ども達であったが、その一部は調査3時点目で達成率が伸びない時期を経験していた。タイプⅡは各時期を通して一貫して集団内の中位から中上位に推移した子ども達であった。タイプⅢは各時期を通して一貫して集団内の中下位から下位に推移した子ども達であった。

以上の一連の研究から、現代の子どもの発達の実態や、発達の变化の特徴、個人差などが徐々に明らかとなってきた。

これら一連の研究で使用した発達評価は横断的検討においても縦断的検討においても一貫した傾向を示しており、その項目の妥当性はある程度担保されていると考えられる。しかし一方で、これらの発達評価項目は約40年前の調査で使用された項目群を基にして、現代の子どもの実態に沿うように項目を変更、改良したものであった。実際に筆者らが研究協力を依頼した保育者からは、「現在の保育内容に沿わない項目が含まれていて、評価しにくい」「絶対的な評価が難しく、判断に困った」などの声が寄せられることもあった。

そこで、本研究では、改めてこれまで筆者らが用いてきた発達評価の項目の妥当性について検討を行う。

妥当性の検証には様々な方法があるが、本研究では、同一の子どもについて2名の評定者が独立に評定した場合の評定の一致率を分析する。

これまでの一連の研究におけるインフォーマルな聞き取りから、知的領域、運動的領域、生活習慣については、「客観的にできる・できないが判断しやすい」との声が多かった。そのため、知的領域と運動的領域については、一致度が高いことが予想される。一方で情緒的領域、社会的領域、遊びについては、「文脈によってできたりできなかつたりするため、判断に迷う」との指摘が多かった。そのため、情緒的領域、社会的領域、遊びについては、一致度があまり高くないことが予想される。

研究方法

調査方法 調査項目は関口らの研究（e.g., 長田ら, 2006; 関口ら, 2005）において使用した項目計128項目（知的領域25項目, 運動的領域20項目, 情緒的領域25項目, 社会的領域25項目, 生活習慣17項目, 遊び16項目。資料参照）であった。マークシートを用い、それぞれの項目について、2人の担任保育者がペアとなり、同一の子どもを対象として独立に、「出来る・よくする」から「できない・しない」の5段階尺度で記入するよう依頼した。38名の保育士が2名1組の合計19組のペアとなって、各ペアの担任クラスの中から対象児を選定した評定値を分析対象とした。1組のペアが3～6名の子どもについて評定した。

調査対象 埼玉県内の7公立保育園の保育者38名に評定を依頼した。これまでの筆者らの一連の研究では幼稚園に協力を依頼していたが、本研究では同一の子どもを2名の保育者に評定してもらうため、複数担任制が一般的な保育園に協力を依頼した。評定対象は3歳児クラス31名（男児13名, 女児14名, 不明4名）、4歳児クラス33名（男児16名, 女児17名）、5歳児クラス37名（男児15名, 女児21名, 不明1名）であった。

調査時期 2011年2月から3月であった。

結果と考察

【妥当性の基準】

各対象児で各項目の2名の評定者の評定値が一致する場合には「一致」、それ以外は、2名の評定者の評定値の差の絶対値を算出し、その平均を求めた（表1）。そして、2名の評定者の評定が一致もしくは評定値の差が1である場合を合算した。以後、この値を「一致度」と呼ぶ。

【各項目の一致度】

表1に各項目の一致度を示す。表の中で太字二重下線のものは一致度が90%以上のもの、太字は一致度が80%から90%のもの、斜体は一致度が70%未満のものを示す。

表1に示すように128項目中36項目（28.1%）が一致度90%以上であった。領域別には知的領域25項目中で6項目（24.0%）、運動的領域20項目中4項目（20.0%）、情緒的領域25項目中10項目（40.0%）、社会的領域25項目中5項目（20.0%）、生活習慣領域17項目中6項目（35.3%）、遊び領域16項目中5項目（31.2%）が、2人の独立した評定者の一致度が90%を超えていた。

さらに84項目が一致度80%以上であった。一致度が90%以上の項目と80%以上の項目を合わせると、領域別には知的領域25項目中で24項目（96.0%）、運動的領域20項目中18項目（90.0%）、情緒的領域25項目中25項目（100.0%）、社会的領域25項目中22項目（88.0%）、生活習慣領域17

表1 発達項目の一致度

質問番号	ペア間の評定値の差の分布 (%)					一致度	質問番号	ペア間の評定値の差の分布 (%)					一致度	質問番号	ペア間の評定値の差の分布 (%)					一致度
	一致	1点差	2点差	3点差	4点差		一致	1点差	2点差	3点差	4点差		一致	1点差	2点差	3点差	4点差			
A1	52.5%	31.7%	10.9%	5.0%	0.0%	84.2%	C1	43.6%	42.6%	13.9%	0.0%	0.0%	86.1%	E1	66.7%	27.3%	4.0%	1.0%	1.0%	93.9%
A2	47.5%	32.7%	15.8%	4.0%	0.0%	80.2%	C2	53.5%	38.6%	5.9%	2.0%	0.0%	92.1%	E2	57.6%	35.4%	7.1%	0.0%	0.0%	92.9%
A3	55.0%	35.0%	8.0%	2.0%	0.0%	90.0%	C3	41.6%	44.6%	12.9%	1.0%	0.0%	86.1%	E3	51.5%	37.4%	11.1%	0.0%	0.0%	88.9%
A4	55.0%	32.0%	11.0%	2.0%	0.0%	87.0%	C4	47.5%	40.6%	10.9%	1.0%	0.0%	88.1%	E4	57.6%	34.3%	7.1%	1.0%	0.0%	91.9%
A5	55.0%	31.0%	11.0%	1.0%	2.0%	86.0%	C5	41.6%	41.6%	13.9%	3.0%	0.0%	83.2%	E5	51.6%	24.2%	24.2%	0.0%	0.0%	75.8%
A6	52.0%	32.0%	16.0%	0.0%	0.0%	84.0%	C6	58.4%	31.7%	5.9%	4.0%	0.0%	90.1%	E6	49.5%	39.4%	9.1%	2.0%	0.0%	88.9%
A7	46.5%	48.5%	2.0%	3.0%	0.0%	94.9%	C7	39.6%	42.6%	13.9%	3.0%	1.0%	82.2%	E7	41.8%	45.9%	9.2%	3.1%	0.0%	87.8%
A8	68.3%	27.7%	2.0%	1.0%	1.0%	96.0%	C8	43.0%	40.0%	15.0%	2.0%	0.0%	83.0%	E8	42.4%	46.5%	7.1%	4.0%	0.0%	88.9%
A9	45.5%	36.6%	14.9%	3.0%	0.0%	82.2%	C9	43.6%	47.5%	7.9%	1.0%	0.0%	91.1%	E9	39.4%	42.4%	16.2%	2.0%	0.0%	81.8%
A10	60.4%	28.7%	6.9%	4.0%	0.0%	89.1%	C10	53.5%	37.6%	7.9%	1.0%	0.0%	91.1%	E10	40.4%	37.4%	18.2%	4.0%	0.0%	77.8%
A11	51.5%	40.6%	6.9%	1.0%	0.0%	92.1%	C11	46.5%	40.6%	10.9%	2.0%	0.0%	87.1%	E11	49.5%	35.4%	15.2%	0.0%	0.0%	84.8%
A12	40.6%	48.5%	9.1%	1.0%	0.0%	89.1%	C12	53.5%	41.6%	3.0%	2.0%	0.0%	95.0%	E12	46.9%	45.9%	7.1%	0.0%	0.0%	92.9%
A13	49.5%	31.7%	16.8%	2.0%	0.0%	81.2%	C13	47.5%	43.6%	6.9%	2.0%	0.0%	91.1%	E13	47.5%	39.4%	9.1%	3.0%	0.0%	86.9%
A14	43.6%	39.6%	15.8%	1.0%	0.0%	83.2%	C14	48.5%	42.6%	5.9%	3.0%	0.0%	91.1%	E14	46.5%	43.4%	8.1%	2.0%	0.0%	89.9%
A15	48.5%	36.6%	12.9%	2.0%	0.0%	85.1%	C15	35.0%	48.0%	14.0%	2.0%	1.0%	83.0%	E15	54.6%	42.3%	3.1%	0.0%	0.0%	96.9%
A16	47.5%	37.6%	13.9%	1.0%	0.0%	85.1%	C16	33.7%	49.5%	12.9%	4.0%	0.0%	83.2%	E16	47.5%	34.3%	15.2%	3.0%	0.0%	81.8%
A17	43.0%	45.0%	12.0%	0.0%	0.0%	88.0%	C17	42.6%	41.6%	13.9%	2.0%	0.0%	84.2%	E17	54.5%	37.4%	6.1%	2.0%	0.0%	91.9%
A18	51.0%	37.0%	10.0%	1.0%	1.0%	88.0%	C18	46.5%	40.6%	11.9%	1.0%	0.0%	87.1%	F1	56.1%	37.8%	5.1%	1.0%	0.0%	93.9%
A19	48.0%	36.0%	10.0%	6.0%	0.0%	84.0%	C19	45.5%	45.5%	5.9%	3.0%	0.0%	91.1%	F2	58.6%	34.3%	6.1%	1.0%	0.0%	92.9%
A20	51.5%	38.6%	7.9%	2.0%	0.0%	90.1%	C20	52.5%	34.7%	11.9%	1.0%	0.0%	87.1%	F3	51.5%	34.3%	13.1%	1.0%	0.0%	85.9%
A21	51.5%	33.7%	11.9%	3.0%	0.0%	85.1%	C21	52.5%	37.6%	9.9%	0.0%	0.0%	90.1%	F4	49.0%	31.6%	16.3%	3.1%	0.0%	80.6%
A22	41.6%	33.7%	24.8%	0.0%	0.0%	75.2%	C22	38.6%	43.6%	15.8%	2.0%	0.0%	82.2%	F5	47.4%	39.2%	10.3%	3.1%	0.0%	86.6%
A23	37.6%	49.5%	9.9%	3.0%	0.0%	87.1%	C23	47.5%	40.6%	10.9%	1.0%	0.0%	88.1%	F6	51.0%	36.7%	11.2%	1.0%	0.0%	87.8%
A24	55.4%	36.6%	5.9%	2.0%	0.0%	92.1%	C24	49.0%	39.0%	9.0%	2.0%	1.0%	88.0%	F7	51.5%	36.4%	9.1%	3.0%	0.0%	87.9%
A25	52.0%	33.0%	13.0%	2.0%	0.0%	85.0%	C25	52.5%	41.6%	3.0%	1.0%	2.0%	94.1%	F8	38.8%	43.9%	15.3%	2.0%	0.0%	82.7%
B1	50.5%	36.6%	9.9%	2.0%	1.0%	87.1%	D1	47.5%	38.6%	9.9%	4.0%	0.0%	86.1%	F9	39.8%	41.8%	10.2%	6.1%	2.0%	81.6%
B2	53.5%	35.6%	9.9%	1.0%	0.0%	89.1%	D2	49.5%	32.3%	17.2%	1.0%	0.0%	81.8%	F10	55.1%	35.7%	7.1%	2.0%	0.0%	90.9%
B3	61.4%	26.7%	9.9%	2.0%	0.0%	88.1%	D3	35.6%	47.5%	14.9%	2.0%	0.0%	83.2%	F11	50.5%	40.4%	8.1%	1.0%	0.0%	90.9%
B4	54.5%	33.7%	10.9%	1.0%	0.0%	88.1%	D4	49.5%	33.7%	14.9%	2.0%	0.0%	83.2%	F12	55.1%	33.7%	9.2%	2.0%	0.0%	88.8%
B5	44.6%	40.6%	11.9%	3.0%	0.0%	85.1%	D5	57.0%	35.0%	7.0%	1.0%	0.0%	92.0%	F13	43.4%	37.4%	18.2%	1.0%	0.0%	80.8%
B6	49.0%	38.0%	12.0%	1.0%	0.0%	87.0%	D6	43.0%	37.0%	14.0%	6.0%	0.0%	80.0%	F14	43.9%	41.8%	12.2%	1.0%	1.0%	85.7%
B7	45.5%	39.6%	10.9%	4.0%	0.0%	85.1%	D7	54.0%	32.0%	13.0%	1.0%	0.0%	86.0%	F15	49.5%	38.4%	9.1%	3.0%	0.0%	87.9%
B8	49.5%	35.6%	12.9%	2.0%	0.0%	85.1%	D8	54.5%	40.4%	5.1%	0.0%	0.0%	94.9%	F16	52.0%	40.8%	7.1%	0.0%	0.0%	92.9%
B9	48.5%	35.6%	12.9%	3.0%	0.0%	84.2%	D9	40.0%	37.0%	21.0%	2.0%	0.0%	77.0%							
B10	57.0%	32.0%	7.0%	4.0%	0.0%	89.0%	D10	50.0%	38.0%	11.0%	1.0%	0.0%	88.0%							
B11	50.0%	37.2%	7.4%	5.3%	0.0%	87.2%	D11	40.0%	49.0%	8.0%	3.0%	0.0%	89.0%							
B12	50.0%	36.0%	11.0%	3.0%	0.0%	86.0%	D12	34.0%	43.0%	16.0%	6.0%	1.0%	77.0%							
B13	48.5%	36.6%	12.9%	1.0%	1.0%	85.1%	D13	45.5%	41.4%	11.1%	2.0%	0.0%	86.9%							
B14	53.0%	42.0%	4.0%	1.0%	0.0%	95.0%	D14	45.0%	38.0%	12.0%	5.0%	0.0%	83.0%							
B15	44.0%	52.0%	2.0%	2.0%	0.0%	96.0%	D15	30.0%	44.0%	24.0%	2.0%	0.0%	74.0%							
B16	60.4%	31.7%	3.0%	3.0%	2.0%	92.1%	D16	51.5%	38.4%	7.1%	3.0%	0.0%	89.9%							
B17	29.7%	37.6%	27.7%	5.0%	0.0%	67.3%	D17	57.0%	36.0%	6.0%	0.0%	1.0%	93.0%							
B18	36.0%	33.0%	27.0%	4.0%	0.0%	69.0%	D18	42.0%	49.0%	8.0%	1.0%	0.0%	91.0%							
B19	33.7%	49.5%	14.9%	2.0%	0.0%	83.2%	D19	59.0%	28.0%	13.0%	0.0%	0.0%	87.0%							
B20	52.5%	39.6%	6.9%	1.0%	0.0%	92.1%	D20	44.0%	46.0%	9.0%	1.0%	0.0%	90.0%							
							D21	44.0%	36.0%	14.0%	6.0%	0.0%	80.0%							
							D22	48.0%	36.0%	16.0%	0.0%	0.0%	84.0%							
							D23	40.0%	49.0%	7.0%	4.0%	0.0%	89.0%							
							D24	53.5%	33.3%	9.1%	3.0%	1.0%	86.9%							
							D25	54.6%	35.1%	8.2%	1.0%	1.0%	89.7%							

注)太字・二重下線は一致度90%以上のもの、太字は80%~90%のもの、斜体は70%未満のもの

項目中15項目 (88.2%)、遊び領域16項目中16項目 (100.0%) が、2人の独立した評定者の一致度が80%を超えていた。

それに対して2人の独立した評定者の一致度が70%を下回る項目は2項目のみであり、いずれも運動的領域の項目であった。

以上の結果から、2名の独立した評定者が評定した場合にも各項目の評定の一致度がある程度高く、一致度が70%を下回る項目が非常に少なかったことが示された。

知的領域、運動的領域、生活習慣については、客観的な判断が容易であると考えられるため、一致度が高いことが予想された。しかし、本研究の結果からは知的領域と運動的領域については、90%以上の一致度の割合が項目全体と比較してやや低めに留まった。それに対して生活習慣については90%以上の一致度の割合は項目全体よりもかなり高かった。この結果は、本研究の協力者が保育所の保育士であったことが影響を与えている可能性が考えられる。保育所においては保育士は生活習慣の習得に重点的に注目していることが考えられる。一方で、知的領域、運動的領域に関しては、評定後のインタビューにおいて「(項目内容に該当する行動を)園生

活の中でやらせてみたことがないので分からない」との指摘が多く聞かれた。今後、幼稚園の教諭を対象に同様の検討を行い、知的領域と運動的領域についての判断の一致程度について検討を行う必要があると言えよう。

一方、情緒的領域、社会的領域、遊びについては、これまでの研究において「判断に迷う」との指摘が多かった。しかし、本研究の結果からは、社会的領域において90%以上の一致度の割合が項目全体と比較してやや低めに留まったが、情緒的領域と遊びにおいては、90%以上の一致度の割合は項目全体よりも高かった。社会的領域に含まれる項目は他児との相互作用場面における行動が中心であるために、どのような相互作用場面なのかということや、相手が誰なのかなど、多くの要因に影響を受けやすく、評定者の判断に幅が開きやすいと考えられる。反対に、情緒的領域や遊びで一致度が特に高かった項目は、比較的对象児個人だけで判断可能なものであり、文脈の影響を受けにくかったと考えられる。これは、「文脈によってできたりできなかつたりするため、判断に迷う」という先行研究におけるインフォーマルな指摘の内容とも合致する解釈であろう。

以上のように一部の領域の項目で2人の独立した評定者の一致度がやや低いものが見られたが、全体的には一致度が80%を超える項目は128項目中120項目(93.8%)に及んだ。したがって、これらの発達評価項目は子どもの発達の実態をかなり正確に反映していると考えられる。言い換えれば、これらの発達評価項目の妥当性が、ある程度保証されたと言えよう。

今後の課題

各項目の一致度に多少の幅があることから、具体的に評定を行った保育者に、評定しやすい項目と評定しにくい項目についてインタビュー調査などを行い、発達の様相をよりの確に捉える項目へと改善する手がかりを探る必要がある。

また、項目間の相関や因子分析などを行い、内容が重複するものや現在の子どもの発達の実態を調査するためには内容を変更する必要がある項目などについては、改良を行う必要があると考える。

さらに今回の協力者が保育所に勤務する保育士だったことから、幼稚園に勤務する教諭を対象に検討を行うことで、より項目の妥当性について詳細な検討が可能であろう。

文献

- 秋山千枝子(2004)「津守稲毛式による現代っ子の発達の特徴」小児保健学会講演集, 202-205.
- 郷間英世(2003)「現代の子どもの発達の特徴についての研究—1983年および2001年のK式発達検査の標準化データによる研究Ⅰ.」子ども学(甲南女子大学国際子ども学研究センター, 5, 11-22.
- 郷間英世(2006)「現代の子どもの発達の特徴とその加齢に伴う変化—1983年および2001年のK式発達検査の標準化データによる研究Ⅱ.」小児保健研究, 62(2), 282-292.
- 長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江(2006)「現在における幼児の育ちの傾向(2)—保育者による発達評価の縦断的調査結果—」十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 4, 55-67.
- 長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江(2007)「現在における幼児の育ちの傾向(3)—保育者による発達評価の複数年度に亘る縦断的検討—」十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 5, 13-24.

- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2008）「現在における幼児の育ちの傾向（4）—保育者による発達評価の3年度に亘る縦断的検討—」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 6, 1-12.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2009）「現在における幼児の育ちの傾向（6）—発達評価における発達タイプ差の3年度に亘る縦断的検討—」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 7, 1-11.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2010）「現在における幼児の育ちの傾向（7）—発達評価における発達パターンの縦断的傾向—」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 8, 1-15.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2011）「現在における幼児の育ちの傾向（8）—発達プロセスの個人差の検討—」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 9, 1-12.
- 関口はつ江（2003）「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連に関する予備的研究」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 1, 27-40.
- 関口はつ江・長田瑞恵・野口隆子（2005）「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連（1）」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 3, 1-13.
- 仙田満（2005）「子どもの居場所—その重要性和安全性（特集：子どもの生活環境）」 発達, 104（26）, 54-58.

資料：発達評価 項目一覧

領域	項目番号	質 問
知的	A1	かなで自分の姓名を書く
	A2	“右”と“左”の区別ができる、または、自分の左と右がわかる
	A3	“きのう”と“あした”の区別がわかる
	A4	“たて”と“よこ”の区別ができる
	A5	かなで書かれた自分の姓名を読む
	A6	両方の指が何本あるか、見ないで正しく言う
	A7	両方の指の数を正しく数える
	A8	黄色や緑など主な色の名前と実際の色がほぼ一致する
	A9	100円玉がわかる
	A10	自分の誕生日がわかる
	A11	四角形のお手本をまねしてかく
	A12	人数を数えて物を配ることができる
	A13	サイコロの出た目の数がわかる
	A14	カレンダーで何日というとその数字を指す
	A15	絵本やお話のあらすじを人に話す
	A16	今日は、何曜日か分かる
	A17	粘土で“～らしく”動物、乗り物、野菜など、かたちのあるものを作ろうとする
	A18	頭、胴体、四肢のそろった人物画を描く
	A19	時計がわかる（12時、3時など）
	A20	相手の（友達）の言葉を理解しながら会話が成立する
	A21	クラス全員への先生の話をも自分のこととして受け止め、理解する
	A22	動植物など自分の関心のあるものを本（図鑑）などでみる
	A23	自然現象（例えば雨が降るわけなど）の理由を尋ねたりする
	A24	ひらがなを読む
A25	ひらがなを書く	
運動的	B1	しぎいの上（あるいは平均台）をまっすぐに両脚をかわりばんに踏み出して歩く
	B2	片足とび（ケンケン）をする、20センチぐらい
	B3	片足立ちをする
	B4	ブランコをこいでいる
	B5	でんぐり返しをする
	B6	スキップをする
	B7	相手が投げたボールを両手で受け止める
	B8	バットや棒でボールを打つ
	B9	ボールをつづけて10回くらいつく
	B10	ひとりなわとびをする（数回つづける）
	B11	子ども同士でリレーをして遊ぶ
	B12	鉄棒で前まわりをする
	B13	うんでいでぶら下がって渡る
	B14	箸で食べる
B15	はさみを使って簡単な形（紙）を切る	
B16	服の前のボタンをひとりでかける	
B17	ひもをかた結びに結ぶ（たて結びでもよい）	
B18	片目だけつむる	
B19	200mぐらい続けて走る	
B20	60cmの高さからとび下りる	
情緒的	C1	友達の喜ぶことを自分から喜んでする
	C2	話を聞きながら想像して楽しむ
	C3	自分でよくしたいのに、できないとくやしがる
	C4	積み木を積んで、もう少しできあがるところでくずれるとくやしがる
	C5	かなしい話を聞いて、かなしがる
	C6	遠足をたのしみに準備していて、中止になるとかなしがる
	C7	友達みんなのなかからはずれると、かなしがる
	C8	草や木をだいじにする
	C9	動物をかわいがる
	C10	小さい子をかわいがる
	C11	絵本や登場人物の、そのときどきの気持ちが言える
	C12	きれいなものを見て“きれい”という
	C13	風の音、雨の音などを感じ、言葉で表現をする
	C14	飼育していた小動物が死ぬとかわいそうがる
C15	困っている子どもにやさしくする	
C16	自分から気がついて全体の役にたつ	
C17	友達の病気やけががよくなると喜ぶ	
C18	相手の気持ちを理解しようと、聞いたり考えたりする	
C19	必要なときは保育者の助けを（援助）を求める	

領域	項目番号	質 問
	C20	自分の要求が通らなくても自分なりに気持ちをおさめる
	(C21)	自分の目標までやりとげようと、がんばる
	C22	ころんですりむいた膝(または手など)が痛くても泣かなくなる
	C23	おとな(先生や親)が喜ぶことをしようとする
	C24	相手や周りの人の気持ちを考えて自分の行動を変える
	(C25)	自分の大切なものが損なわれると悲しがる
社会的	D1	友達と遊んでいるとき、ほかの子の承諾や同意をもとめる
	D2	助けが必要なとき、ほかの子に助けを求める
	D3	ほかの子どもを援助したり、守ったりする
	D4	ほかの子どもたちに玩具をもってくる
	(D5)	ほかの子どもにめいわくをかけたなら、おわびを言う。
	D6	競争心がある(他の子どもとの間で)
	D7	数人がいっしょになって、子どもの発案した遊びをいっしょにする
	(D8)	自分のしたことを保育者に話して聞かせる
	D9	自分のしたことに責任を負う(自分のあやまちを謝るなど)
	D10	まかされたことを責任をもってする
	D11	保護者がいてもいなくても、きまったことはちゃんとする
	D12	“わたし”とか“ぼく”とかいう言葉で自分を呼ぶ
	D13	自分より小さい子ができるまで待つてあげる
	D14	友達が何かしているとき、じゃまをしない
	D15	お店屋さんごっこで、おつりのやりとりをする
	D16	信号を見て、正しく渡る
	(D17)	じゃんけんで勝ち負けがわかる
	(D18)	共同の物を順番に使うことができる
	D19	けんかなどのとき、自分の考えを相手にはっきりいう
	(D20)	友達同士のトラブルの間に入って收拾しようとする
	D21	保育者が掃除など子どもの生活のための仕事をしているのを見て、手伝おうとする
	D22	いやなときは相手にはっきり「いや」という
	D23	悪いことや困ることをしている子に「いけない」と止める
	D24	クラスみんなで何かするときなど、みんなに合わせて行動する(遅れないなど)
	D25	助けられたり、して貰ったとき「ありがとう」と感謝する
生活習慣	(E1)	ソックス(短い靴下)をひとりではく
	(E2)	ひとりで鼻をかむ、または、自分で気がついて鼻をかむ
	E3	大便をひとりでする(全く手がかからない)
	(E4)	うがいをする
	E5	ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく
	E6	嫌いなものでも、がんばって食べようとする
	E7	汗をかいたら自分で着替える
	E8	水をこぼしたり、こぼれていたなら、自分からぞうきんでふく
	E9	自分から、遊んだあとの自分の遊具をかたずける
	E10	自分から、遊んだあとの皆の遊具をかたずける
	E11	手ぬぐいやぞうきんをしぼる
	(E12)	自分から“いただきます”や“ごちそうさま”をいう
	E13	いわれなくても食事の前に手を洗う
	E14	脱いだものを一応たたんで(きちんとでなくてもよい)決まった場所に置く
	(E15)	食事の片づけを自分でする
	E16	所持品の始末をきちんとする
	(E17)	挨拶(おはよう、さようならなど)を自分からする
遊 び	(F1)	自分から遊びを見つけて遊び込む
	(F2)	遊びのなかで、新しいことを考えだしたり、新しいやりかたを工夫したりする
	F3	周囲の物を積極的に遊びに活用する
	F4	身辺のものや出来事に関心を持って、遊びを取り入れたり、発展させる
	F5	いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う
	F6	遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸してといて、何とかして達成しようとする
	F7	遊びがうまくいかないとき、自分達で協力して解決しようとする
	F8	遊びに集中し、周りが騒いでも妨げられない
	F9	積み木やブロックで、遊びの場所をつくる
	(F10)	ごっこ遊びのとき、そのものになりきって遊ぶ
	(F11)	友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ
	F12	積極的に泥遊びや砂遊びを楽しむ(どちらか片方でよい)
	F13	遊びの中で新しい役割を考え出したり、自由に役割を交換したりして遊ぶ
	F14	友達の遊びに進んで加わったり、友達の提案に乗って協調して遊ぶ
	F15	同じ遊びを数日間継続して発展させながら遊ぶ
	(F16)	遊びのルール(陣地ではつかまらないなど)を理解して遊ぶ

注) ○ は一程度90%以上の項目, ○ は一程度が70%未満の項目を示す。